彙　報

第四八回野尻湖クリルタイ

赤木　崇敏

第四八回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）が、二〇一一年七月一六日（土）から一八日（月）まで、長野県信濃町野尻湖畔の藤屋旅館において開催された。参加者はのべ四三名。まずは、恒例のコンフェッションにて各参加者が報告した、昨年（二〇一〇）七月以降一年間の研究業績について紹介したい。なお、著書・論考の副題は原則として省略した。

愛新覚羅凱和（京都大M）は、四月より立命館大から進学。清代ハルハ・モンゴルについて研究を進めている。**青木雅浩**（早稲田大非常勤講師・東北大東北アジア研究センター専門研究員）は、研究報告二本、講演二本を行ったほか、早稲田大出版部より『モンゴル近現代史研究：一九二一～一九二四年』を上梓し、早稲田大モンゴル研究所編（吉田順一監修）『モンゴル史研究―現状と展望―』（明石書店）に「モンゴルとソヴィエト、コミンテルン」を発表した。**赤木崇敏**（大阪大）は、「十世紀敦煌の王権と転輪聖王観」（『東洋史研究』六九―二）、"Six 10th Century Royal Seals of the Khotan Kingdom"（*Old Tibetan Document Online Monograph Series vol. 3*, 東京外大ＡＡ研）などを執筆。また、昨年のクリルタイ報告内容の一部を『西北出土文献研究』九に発表した。**阿部由美子**（東京大Ｄ・学振ＤＣ）は、昨夏、中国社会科学院近代史研究所で開催されたシンポジウム「清代満漢関係史国際学術研討会」で「中華民国北京政府時期清室、宗室、八旗与民国政府的関係」と題して報告。また、北京市社会科学院満学研究所のシンポジウム「満学：歴史与現状国際学術研討会」では清末新政時期の日本留学生研究が革命派学生に偏っている現状を是正すべきとの報告を行った。**アラムス**（神戸大Ｄ）は、「清代におけるモンゴル文農地質入契約文書の書式」（『日本モンゴル学会紀要』四一）を執筆。**アルハン**（神戸大研究生）は、清末民初の内モンゴル・ハラチン地域における学堂について研究している。**池尻陽子**（東洋文庫・学振ＰＤ）は、昨年八月にバンクーバーで開催された国際チベット学会で"The Foundation of the Yong-he-gong Monastery（dga' ldan byin chags gling）and the Qing's Policies on Tibetan Buddhism"と題して報告したほか、「『清朝前期理藩院満蒙文題本』について」（『満族史研究』九）を執筆。初参加となった池田

修太郎（立命館大学部生）は、ジュンガル史、特にガルダン＝ツェリンについて卒論を準備中。石川禎仁（大阪大D）は、昨年九月に大英図書館で敦煌文献を調査。また昨年度に帰義軍時代（九世紀後半～一一世紀初頭）敦煌オアシスの水利管理に関する修士論文を提出し、その一部を七月末の中央アジア学フォーラムにて報告した。磯部淳史（立命館大研究生）は、「清初における六部の設置とその意義」（『立命館文学』六一九）、「太宗・順治朝におけるグサ＝エジェンとその役割」（『満族史研究』九）、「順治朝の後継者問題と康熙帝をめぐる旗王たち」（『立命館東洋史学』三四）を発表した。伊藤一馬（大阪大D・学振DC）は、昨年八月には内蒙古考古学研究所にて、今年二月にはロシア科学アカデミー東方文献研究所にて、それぞれ宋～元代カラホト出土漢文文書を調査。また、今夏『史学雑誌』一二〇―六に「北宋における将兵制成立と陝西地域」を発表した。岩田啓介（筑波大D・学振DC）は、昨年度に一八世紀初頭ダライ＝ラマの転生認定問題をめぐる内陸アジアの諸勢力間関係について修士論文を提出。さらに今夏、「リタンの童子擁立と青海ホシュート部内の権力関係」と題して歴史人類学会例会で口頭報告した。牛根靖裕（立命館大研究生）は、「モンゴル統治下の四川における駐屯軍」（『立命館文学』六一九）を、また松田孝一と共著で「エルデニ・ゾー残碑の研究」（『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』二四―三）を発表。さらに八月に立命館東洋史学会大会にて「一三三〇年代の元朝とコンギラト部」と題して口頭報告を行う。梅村坦（中央大）は、“On the History of Central Eurasia: Source Materials Show the Past and the Present”（*Introducing the Faculty of Policy Studies: Integrating Policy and Culture*, 中央大）、「ウイグル人のタリム盆地定住」（『世界史史料四：東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ』岩波書店）、「現代カシュガルのウイグル人鍛冶職人集団」（『中央ユーラシアの文化と社会』中央大）などを執筆。また、中国・ドイツの研究者と国際的な研究組織を結成して、吐魯番博物館所蔵の非漢文文書の共同研究を進めており、来年度にその報告書が刊行される。岡洋樹（東北大）は、国内外で学会報告・講演を三本行ったほか、昨年二月に東北大学で開催された、九〇年代以降の旧ソ連諸国をめぐる国際シンポジウムの報告論文集『歴史の再定義』（東北大東北アジア研究センター）を編著者として上梓し、序論と論考「モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐって」を執筆。また、『歴史評論』七二五に「清朝の外藩モンゴル統治における新政の位置」を、前出の『モンゴル史研究―現状と展望―』に「清代モンゴルの社会・行政統治構造理解をめぐる試論」を発表し、さらに承

志著『ダイチン・グルンとその時代』と楠木賢道著『清初対モンゴル政策史の研究』をそれぞれ書評した（『歴史学研究』八六六、『東洋史研究』六九―四）。岡田英弘（東京外大名誉教授）は、自身初の研究論文集となる『モンゴル帝国から大清帝国へ』を昨年一一月に藤原書店より上梓。その出版を記念した講演録が雑誌『環』四五に今春掲載された。また、『岡田英弘著作集』全六巻も同書店より企画されており、その第一巻として『康熙帝の手紙』の増補改訂版が来年初頭にも刊行予定である。片山章雄（東海大）は、旅順博物館に所蔵される大谷探検隊将来の八世紀トゥルファン出土文書のうち、無文字紙片を集中的に調査。その成果は、土肥義和代表の科研報告書『内陸アジア出土四～一二世紀の漢語・胡語文献の整理と研究』（平成二二年度分冊）に王振芬・張銘心との共著で「旅順博物館所蔵文書と大谷文書その他文書の綴合」として発表された。神谷秀二（早稲田大D）は、「清朝入関前における世職の継承次数付与に関する一考察」（『史滴』三二）を発表。木戸利衣（東京外大学部生）は、ジェブツンダンバ一世と康熙帝との関係についてモンゴル語史料を用いて卒論を準備中。楠木賢道（筑波大）は、中国・韓国の国際学会での発表三本、国内発表一本を行い、「清太宗皇太極的太廟儀式和堂子」（『清史研究』八一）、「《両国会盟録》中所見志筑忠雄与阿部龍平対清朝北亜之理解」（『民族史研究』九）を執筆した。齊藤茂雄（大阪大D）は、内モンゴル・フフホト周辺、陰山山脈周辺、洛陽の各地域で景観・石刻調査を、サンクトペテルブルクで突厥碑文拓本の調査を行った。また「突厥「阿史那感德墓誌」訳注考」（『内陸アジア言語の研究』二六）を執筆した。齋藤宏（筑波大学部生）は、康熙帝第二子胤礽の廃太子問題について、卒業論文を執筆中。坂口珠美（陸上自衛隊）は、清代トゥバにおけるモンゴル文化の需要と変遷について研究している。佐藤憲行（東北大東北アジア研究センター教育研究支援者）は、漢人商業地区「買売城」から見る清代モンゴルの経済構造や、ロシア領事館設立後のフレーについて現在研究を進めている。澁谷浩一（茨城大）は、「キャフタ条約の条文形成過程について」（『茨城大学人文学部紀要　人文コミュニケーション学科論集』九）、「『軍機処満文準噶爾使者檔訳編』について」（『満族史研究』九）を執筆した。菅原純（東京外大AA研フェロー）は家族で参加。新刊紹介一本、学会参加記一本を執筆し、“Reconsidering the religious policy of Yaqub Beg: Accounts from documents and relics”（『「歴史上的中国新疆與中亜」国際学術研討会』、烏魯木斉）や“Debt-Related Contracts in Early Twentieth Century Xinjiang”（10th Annual Conference of the Central Eurasian Studies’ Society, Michigan

State University）など国際学会で報告を行っている。幹事の一人、杉山清彦（東京大）は、四月に駒沢大より転任。山西・内蒙古で「旅蒙商」の調査、中国で学会報告二本、国内学会報告二本を行い、菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』（北海道大出版会）に「明代女真氏族から清代満洲旗人へ」を、佐々木史郎・加藤雄三編『東アジアの民族的世界』（有志舎）に「女直＝満洲人の「くに」と「世界」」を寄稿。また、『内陸アジア史研究』二六にて前出の承志著『ダイチン・グルンとその時代』を書評した。初参加の孫佳（吉林大D・筑波大博士特別研究生）は、修士論文で日唐の朝貢関係を扱った。現在は、金代の行政路制について研究を進めている。多久孝一郎（筑波大学部生）は、清朝・ジュンガル関係史、とくに一七～一八世紀の中央ユーラシア交易について研究している。谷口綾（龍谷大D）は、元代の医学史について研究を進めている。朝魯孟格日勒（チョルモンゲレル）（神戸大M）は、清代外モンゴルにおける牧地紛争について研究している。中嶌哲平（北海道大D・学振DC）は、今年六月の日本中央アジア学会研究ワークショップにて「帝政ロシア治下バクーにおける活字メディア」と題する報告を行った。西田祐子（大阪大D）は、昨年度に隋末～唐前半期の契苾氏に関する修士論文を提出。また『内陸アジア言語の研究』二六に「『新唐書』回鶻伝の再検討」を執筆した。萩原守（神戸大）は、「清朝支配下におけるモンゴル遊牧民の日常生活と裁判（一八世紀後半）」、「清朝支配下におけるモンゴル人の精神世界と遊牧生活（一九世紀半ば）」（以上、前出『世界史史料四』）、「中国・国家図書館所蔵「崇徳三年軍律」の文献学的再検討」（『アジア・アフリカ言語文化研究』八一）を執筆。また、国際東方学者会議にて一六～一八世紀のモンゴル語文献資料に関する報告を行った。旗手瞳（大阪大D）は、昨年九月に大英図書館で敦煌文献の調査を行った。その成果をもとに、吐蕃統治下の吐谷渾について修士論文を提出した。ブレン（京都大D）は、モンゴルの近代ナショナリズムの成立過程について活字メディアを通じて分析を進めている。堀川徹（京都外大）は、昨秋の内陸アジア史学会五〇周年記念シンポジウムで基調講演「モンゴル時代以降の西部内陸アジア史」を行い、その内容を『内陸アジア史研究』二六に発表した。また、関西大三研究所合同シンポジウムにて「中央アジア文化における連続性について」と題して報告した。宮脇淳子（国士舘大非常勤講師・東京外大非常勤講師）は、『世界史のなかの満洲帝国と日本』（ワック出版）が再版されたほか、「侵略と虐殺と弾圧と～血塗られた党史」を『別冊正論』一五に、前掲の岡田英弘著『モンゴル帝国から大清帝国へ』の刊行によせて学界動向を同書に寄稿。さ

らに、東洋史エッセイを『歴史通』（ワック出版）に連載している。**村上信明**（創価大）は、「駐蔵大臣の『瞻礼』問題にみる一八世紀後半の清朝・チベット関係」（『アジア・アフリカ言語文化研究』八一）を執筆したほか、岡・杉山と同じく承志の著作を書評した（『満族史研究』九）。現在は、満漢合璧『西招図略』（大阪大箕面図書館蔵）の翻訳に着手している。**森部豊**（関西大）は、山西・陝西・甘粛の各省でソグド人関係史料の調査を行った。また、「ソグド人の東方進出とその活動」（『アジア遊学』一三七）を執筆し、共編著者として関西大出版部より『アジアが結ぶ東西世界』を上梓。同書には、自身の論考「東ユーラシア世界におけるソグド人の外交活動に関する覚書」のほかに、北京大・栄新江の「イスラーム化以前の中央アジア」の翻訳を収める。また、栄新江「新出石刻史料から見たソグド人研究の動向」の翻訳と中国調査の史料紹介とを、『東西学術研究所紀要』四四に発表した。**柳澤明**（早稲田大）は、『岩波講座東アジア近現代通史　一　東アジア世界の近代』（岩波書店）に「ロシアの東漸と東アジア」を、前出の『モンゴル史研究―現状と展望―』に「清朝の八旗制とモンゴル」を執筆した。**山田美保**（都立深川高校・お茶の水大M）は、清朝乾隆期の社会の捐納について修士論文を準備中。**山本明志**（大阪大特任研究員）は、昨夏、フフホトで元代カラホト出土文書、蘇州・無錫で元代石刻の調査を実施。また今春に「モンゴル時代に中国へ赴くチベット人をめぐって」と題して中央アジア学フォーラムで研究報告を行った。

次に、研究報告の概要を紹介する。初日一六日午後は、参加者受付の後に二本の報告が行われた。**西田祐子**「唐の第三次阿史那賀魯征討と西突厥の牙庭について――『新唐書』記事の基礎的分析を手がかりに――」は、唐代史研究の基本史料『新唐書』が内包する記事の不明瞭かつ錯簡に対し注意を喚起し、その一例として、高宗期の西突厥阿史那賀魯征討を取り上げて再分析。従来、西突厥牙庭の地理比定及び阿史那賀魯討伐軍の行軍進路については、『新唐書』阿史那賀魯伝に基づく松田壽男説が広く支持を集めていた。本報告では、『冊府元亀』『通典』所収の関係記事との比較考究から松田説を大きく修正するとともに、石刻や出土文書など新出史料が注目される現在においても、『新唐書』をはじめとする基本典籍の徹底的な読み直しが必要であることを訴えた。実際にモンゴル高原・ジュンガル盆地・天山山脈を踏査した参加者からは、多くの地理情報が寄せられた。

孫佳「金代行政路制研究――中央による行政路に対する政治統轄と権力制御――」は、金朝治下の行政区画である

路制について、従来看過されてきた中央による地方への統轄・統制という視点から分析。まず、金朝中央が政治情勢の段階的変化と女真族の民族的特徴に応じて、行政路を設置して有効な統治手段を確立したことを論じた。次に、行政路の官員における女真人の比率の高さから、そこに民族政策的な偏向が存在したことを明らかにし、非女真人による地方権力の掌握を防ごうとしていたと指摘。最後に、中央は行政路と並行して中央に直属する転運司路・塩使司路・按察司路など職能路を設け、それらを通じて地方への統制を強めるとともに地方勢力の割拠を防止したと結論づけた。

夜の部の**岩田啓介「ラサン＝ハン政権の政権運営と新ダライ＝ラマ六世擁立」**は、一八世紀初頭の青海ホシュート部首長であったラサン＝ハンの政権運営と新ダライ＝ラマ六世擁立の背景を検証した。東チベットの公課回収と新ダライ＝ラマ六世冊封がラサン＝ハン政権の喫緊の課題であり、それは東チベットという同一の地域に由来することを提示。さらに、ラサン＝ハン政権は財政的に極めて困窮しており、対立する青海ホシュート部首長が分有した東チベットの公課回収を目的として、東チベット出身のダライ＝ラマを擁立したと論じた。そして、ダライ＝ラマをめぐる抗争の実態が、東チベットの経済的利権に関する抗争であったことを明らかにした。

二日目、一七日午前は、報告が二本。**谷口綾「元代の医学と士人層の認識について」**は、元代に出現する「儒医」（医に精通、医を生業とする士人）を、士人と民との間に介在する中間階層・職業的知識人階層と見なし、彼らを軸に元代における医学・医療行政のあり方について検討した。元代では、世祖フビライ期までに医療機構が整備されるとともに、科挙落第または廃止によって医業を専門とする職業的士人が発生した。また、医と儒との両方に精通する官僚・医者の養成が目指され、医師には儒学理念に基づく医療行為が求められるとともに、医学を含む諸知識の習得が士大夫にも求められたと結論づけた。

澁谷浩一「一七三四―一七四〇年の清とジューン＝ガルの講和交渉について」は、従来その内容の正確な理解が十分ではなかった一七四〇年の清とジューン＝ガルとの講和の成立経緯やその内容について、新出の満洲語史料に基づき、中央ユーラシアの国際関係という視点で再検討。講和内容には、従来知られていなかったジューン＝ガル側のウリャンハイの現状維持という重要な項目が含まれていたことを明らかにした。また、講和そのものは、清露のキャフタ条約締結を前提とし、その影響の中で成立したものだったということを指摘した。さらに清露間に続き、清・ジューン＝ガル間でも講和が実現したことにより、中央ユーラシ

ア東部には平和共存の時代が到来するものの、直後のガルダン＝ツェリン死後のジューン＝ガル内紛と清朝による武力制圧により、中央ユーラシアは新たな段階に入ると論じた。

午後は日本で長期留学する二名の留学生の報告が行われた。まず、アラムス「清代におけるモンゴル人箭丁の戸口地喪失形態――帰化城トゥメト旗を中心に――」は、八旗旗人と並び清朝軍事力の柱の一つであったモンゴル人箭丁が漢人農民への賃貸・質入れ・売買によって戸口地を喪失していく過程について、帰化城トゥメト旗を事例として復元した。報告では、漢語・モンゴル語契約文書史料の詳細な検討から、喪失過程を永久賃貸契約、賃貸に関わる訴訟、恒久的な質入れ、質入れから売買への切換え、直接売買の五パターンに分類。さらに、この喪失は、モンゴル人箭丁の生活基盤の弱体化のみならず、草原の内属モンゴル兵の戦闘力低下をも招き、延いては漢人農民の浸透によるモンゴル言語文化の喪失に繋がったと指摘した。

ブレン「近代モンゴルにおける活字メディアの出現とその意義――『モンゴリン・ソニン・ビチク』（一九〇九―一九一九）に着目して――」は、モンゴルの独立宣言以前に清朝領内で発行されていた唯一にして初のモンゴル語活字メディアであり、モンゴルにおけるナショナリズム運動に大きな役割を果たしたとされる『モンゴリン・ソニン・ビチク』を取り上げ、その所蔵状況・紙面構成・読者層・発行部数など基礎情報の整理・分析を行った。本紙はロシア帝国・大日本帝国など外部勢力とモンゴル人知識人との協力により登場したものではあるものの、近代的な言説空間を生み出し、結果的にモンゴルにおける近代的知識人の登場を促したと評価した。

夜の部、菅原純「二〇世紀初頭カーシュガル地方のワクフ：その規模と分布」は、報告者が二〇〇七年に新疆で複写を入手した新史料『カーシュガル・ワクフ文書集成（CKWD）』の内容・性格を明らかにし、収録されたワクフ物件の規模と分布を検討した。このCKWDは、ワクフ対象物件九八件に対し一三一点のテュルク語文書（内一点のみペルシア語）を含み、一九三六年頃にカーシュガルで展開された組織的なワクフ接収運動の一環として編纂されたものである。その内容は、カーシュガル地区の聖者廟（mazar）その他の公的施設に寄進された「慈善ワクフ」と個人財産の分散を回避するための「家族ワクフ」とに大別される。このうち「慈善ワクフ」の規模に注目すると、Yusuf Qadir Khan 廟や Hazrat-i Mollam 廟など現在も著名なマザールのワクフ財が突出しており、往時より当地における社会的影響力の大きさが看取できる。また、この両者

のように社会的影響力あるマザールは郊外に広大なワクフを有し、それ以外の聖者廟は基本的に聖者廟近辺にワクフ不動産を有する傾向にあることを明らかにした。

最終日一八日午前には若手二人の報告が組まれた。阿部由美子「中華民国北京政府時期の北京満洲族社会――優待条件をてがかりに――」は、これまで十分に顧みられなかった辛亥革命以後の満洲族社会について、清朝政府と中華民国政府との間で締結された「優待条件」を手掛かりに検討。清室に対する帝号の承認や歳費の提供、皇族に対する爵位の承認、さらに清代以来の満洲族の社会組織である八旗も民国の官として保存するなど、北京政府は様々な優待を行っていた。旧来の革命史観の如く清朝と民国政府との断絶を強調するのでなく、このように満洲族に注目すれば、革命以降も一九二四年の北京政変までは清代からの社会的連続性が認められると主張。しかし、一九二四年から二八年にかけて満洲族社会の解体が進み、また国民政府の北伐の完成とともに優待条件も完全に消滅し、満洲族社会は新たな局面を迎えたと結論づけた。

最後に、神谷秀二「清朝入関前の六部大臣について」は、清朝入関前に設けられた六部大臣（承政・参政）の身分について、彼らの持つ世職と待遇（儀礼・官糧納入免除）を比較検討した。天聡年間（一六二七～三五）の承政・参政に与えられた世職の等級は様々であり、世職のない人間も六部大臣の任に就いていた。儀礼面では、八旗官・世職官・六部大臣の各身分体系にある程度の対応関係が認められるも、六部大臣は実際に有する世職以上に優遇される者が多い。ただし、官糧納入免除については世職が重視されていた。これらの規定は崇徳元年（一六三六）に定められており、天聡から崇徳へと移り変わる際の制度変革の一つとして位置づけられると指摘した。

さて、今年のクリルタイは、唐代突厥史から民国期満洲族史に至るまで時代も対象も広範に及び、また長期留学生三名をも含んだ、多彩な報告者の顔触れであった。本会の魅力は、二泊三日という合宿期間を通じて多様な分野の専家と議論を深化しうること（もちろん最終日の報告者にはその時間が十分与えられないという懸念もあるが）、またコンフェッションなどにより専門領域を超えた学術交流を深められることにあろう。

一方で、近年の本誌クリルタイ彙報では、参加者の漸次減少や専門分野の偏向に対する嘆きや将来的不安がしばしば寄せられている。往時の盛会を知る者にとって憂うるべき現状ではあろうが、大学暦の変動や、多忙化する学務、同時期に開催される各種研究会の増加など、さまざまなマイナス要因があるにもかかわらず、毎年四〇人以上が、し

かも斯学の大家から学部生に至るまでが集う本会の状況は、必ずしもすぐに悲観すべきものではないように思われる。また、参加者の専門とする分野や地域の偏差は確かに認められるものの、多分野にまたがる学術交流を行える本会の魅力が大幅に減じられているわけではない。本会が有する、学際的にして専門的、包括的にして刺激的な交流の場は、その規模をやや縮小したとはいえ、なおも大きな意義を有しているのである。学部生・院生など若手は、このような場をより積極的に利用されたい。

第四九回クリルタイは来年七月一四日（土）から一六日（月）、同じく藤屋旅館において開催される予定である。

（大阪大学大学院文学研究科助教）